

母が私に残した言葉

仁愛女子高等学校

吉田 彩乃

毎月一回の月参りの日に、家に御坊さんがやって来る。その時私は、長いお経を聞きながら、仏壇の隣で穏やかに微笑む母と祖母の遺影をぼんやりと眺めていた。

母が亡くなったのは私が中学三年の時の二月。丁度、私立高校の合格発表直後だった。仁愛を専願で受けた私が、合格した事を知らせた時の母の心から喜ぶ笑顔が、今でも私の脳裏に焼き付いている。

母から病院で余命を告げられた事を初めて聞いた時、私は信じられなかった。正確には、信じたくなかったのである。その日までずっと、いつか治るだろうと信じていた。私が十一歳の時に発病した時から、いつかまた家族皆で幸せに過ごせるのだと思っていた。そう信じていたからこそ、一人の夜でも辛い事でも頑張っただけでよかったのだ。だから余計に、どうして私達だったのか、と何か目に見えない物に母を奪われそうな恐怖をぶつけてたくて仕方がなかった。

その出来事は、私たち家族にとって大きな傷跡となったのであった。辛く、苦しく、悲しい感情が入り混じって、ずっしりと重い鉛のように私の心の奥深くに沈んで、心の中にぽっかりと大きな穴を開けられてしまった、まさにそんな感覚だった。

しかし、母との死別は失った物ばかりではないと思う。あの頃丁度、受験を直前に控えていた私に、母はある言葉を残してくれた。

「どんなに暗い夜でも、明けない夜はないんだよ。今がどんなに辛くても、必ず終わる時が来る。日の出のように、きっと楽しい事が待ってる。だから、今くじけないで。夜明け前が一番、暗いんだよ。」

私はこの言葉に、何度救われたかは分からない。母はこの言葉が好きだったそう。心の持ちようで、辛い状況も乗り越えられると。本当にその通りだと思える。後になって思ったのは、母は表面的には受験を応援するつもりでこの言葉を私に言ってくれたのだが、実は自分がいなくなってしまう後で、私が人生に挫折しそうになった時、自分がいなくても私が再び立ち直れるようにこの言葉を残して

くれたのではないか、ということであった。その証拠に、母は毎年私が二十歳になるまで「未来への手紙」という物を使って、誕生日に手紙が届くように書き残してくれていて、文面にたまにこの言葉が書き残してあるのであった。

私は母が私に残してくれたこの言葉を胸に、これから辛い事が起こっても乗り越えていきたい。どんなに辛く、夜明け前の真っ黒な空のように暗い気持ちになっても、私はめげずに前を向いて、夜明けを待とうと思う。

今はまだ、家の中にわずかに残る母の面影を思い出すと、チクリと胸が痛くなるが、それでもこの痛みをいつかは乗り越えて、私の強さになってくれたらいいな、と思う。

東日本大震災や、先日の広島での自然災害で家族が犠牲に合った方々などの辛さは私も計り知れない。しかし、そのような人々も毎日精一杯生きているのを見ると、私も頑張らなくてはいけないと思う。

私は、人の死は人を強くすると思う。どんなに辛くても、時間は止まってくれない。残された人は何とか踏ん張って生きていかねばならない。決して消える事のない虚無感や心の傷を抱えながら、それでも生きてゆくのだ。

その辛さを乗り越えるのは容易な事ではないが、それを乗り越えた時、必ずその人の力になるのではないかと私は思う。

この経験は辛かったけれど、決して全てが辛いわけではなく、大切な事を気づかせてくれたと思う。だから私は母に感謝したい。

私には母の残してくれた言葉がある。その事を忘れずに、これからももっと心が強く成長できるように毎日を頑張りたいと思う。

今、私が母に伝えたい言葉は一つだけ。

「お母さん、この言葉を私に残してくれて本当に、ありがとうございます。」